

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2012年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院		文学研究科	英米文学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名		
	文学研究科英米文学専攻 博士課程後期課程3年	小笠原 清香 印		
指導教員	所属・職名	氏名		
	文学研究科・教授	新妻 昭彦 印		
自然・人文・社会の別	人文	個人・共同の別	個人	
研究課題名	認知語用論的側面から考察する強意副詞の通時的意味変化と多義構造			
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名		
	文学研究科英米文学専攻 博士課程後期課程3年	小笠原 清香		
研究期間	2012	年度		
研究経費	196,661	千円（実績額又は執行額）		

研究の概要（200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。）

一般に強意副詞の意味変化については、具体的語彙から強意語への文法化および脱語彙化のプロセスが観察されてきたが（Partington 1993; Lorenz 2002）、各語彙がその後に得た意味に着目されることはなかった。Méndez-Naya (2003)では *swithe* の文法化について *Helsinki Corpus of English Texts* を用いた調査から分析しているが、主な対象は形容詞・副詞修飾の用例であり、この語が最後に発達させた ‘rapidly/quickly’ の語義に関しては、詳細に論じられていない。本研究は、強意副詞 *swithe* と *fast* の意味変化に着目し、これらの語が強意語としての流行の後、迅速の意味を発達させているという史実から、強意語は「速く」という速度を表す意味へと変化する意味変化の特質を持つことを論じ、強意語が再び語彙的意味を派生させているという点で、一般的に主張されるものとは逆方向の変化が観察されることを示す。

キーワード（研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。）

[英語強意副詞] [意味変化] [文法化]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

1. 研究背景

一般に、強意副詞の意味変化には文法化・脱語彙化といった現象が観察され、多くの強意副詞が content word から function word へと変化する傾向があることが述べられてきた (Rissanen 2007)。Méndez-Naya (2003) は *swithe* が、本来の「力強く」といった語彙的意味を失い、強意副詞になる過程を考察しているが、この語が最後に発達させた ‘quickly’ の意味について特別な注意が払われることはなかった。このように、これまでの先行研究では脱語彙化の過程のみに焦点が当てられてきたが、史実が示す強意副詞の意味変化の特徴として、具象領域→抽象領域→具象領域を繰り返す変化のパターンがあり、さらにその変化と意味の相関性を図式化すると、この変化は放射状のカテゴリーの一端を想起させるパターンを描くことが分かる。現代では廃用になった語も含め、「迅速」の意味と「強意」の相関性を中心に考察すると、副詞の原義と考えられる概念によって、意味拡張には認知的制約がかかっていることが考えられる。

1.1. 研究目的

本研究では以下の点を明らかにすることを目的とした。1) 強意副詞の文法カテゴリーと意味特質の定義 2) 意味拡張におけるメタファー・メトニミーの機能と認知的制約 3) 強意副詞の文法化・脱語彙化

1.2 調査対象・方法

1) 強意副詞の文法カテゴリーと意味特質の定義については、これまでの先行研究と、*OED*, *MED*, *HTOED*, Mustanoja (1960) といった辞書・シソーラス・文法書における強意副詞の意味規定の比較、また Quirk et al (1985) をはじめとして、これまでの強意語研究における定義をまとめた上で、本研究における強意副詞の定義づけを行った。2) 意味拡張におけるメタファー・メトニミーの機能と認知的制約に関しては、強意と迅速の意味を持つ *fast*, *hard*, *swithe*, *yerne*, *wightly*, *quickly*, *smartly*, *snell* を対象として、これらの類義語に共通する意味拡張の制約をみた。また、プロトタイプからの変化を示していると考えられる *fast* の ME における用例を中心に、メタファーとメトニミーによる意味拡張をみた。最後に、3) 強意副詞の文法化・脱語彙化の再検討を行う目的で、*Helsinki Corpus of English Texts (HC)* を用いて通時的調査を行った。対象語は強意副詞 *swithe* と *fast* であり、*swithe* に関しては Méndez-Naya (2003) による *HC* を用いた通時的調査を参考にしながら、本研究では動詞修飾の *swithe* と *fast* の意味変化の過程に着目し、文法化・脱語彙化について再検討を行った。

2. 研究成果

2.1 強意副詞の文法カテゴリーと意味特質の定義

強意語の修飾対象は、一般的には形容詞・副詞に限定されることが多い Partington (1993), Lorenz (2002)。しかし、統語的振る舞いによって強意語の機能を限定する見方がある一方で、Quirk et al (1985) では、意味特質により強意語を捉えている。ここでは強意語は、形容詞・副詞以外の文の構成要素に対しても修飾する機能を持ち、広範な語彙範疇を構築する。さらに意味特質については、Quirk et al (1985) では高低に関わらず程度を表すものを強意語とし、*amplifiers* と *downtoners* に大別している。このように強意語の統語的・意味的規定は、これまでの先行研究では定まりきっていない。こうした現状は *OED*, *MED* における強意語の語義記述にも現れている。例えば *swithe* は *OED*, *MED* ともに *intensifier* として記述されているが、*fast* は *MED* では *intensive adverb* として説明されている一方、*OED* では ME の強意語としての用法は ‘earnestly, diligently’ といった *manner adverbs* として説明されており、*swithe* の項で用いられていた ‘intensive’ や、‘very much’ などの表現が用いられていない。

研究成果の概要 つづき

動詞を修飾する程度副詞は、verb degree modifier などと呼ばれ、形容詞・副詞を修飾する強意語 (intensifier) とは異なる呼称が与えられることも多いが、これらは Allerton (1987) では “two subclasses of a single class” (1987: 18) として捉えられている。本研究では強意語という一つのクラスの下位区分として動詞修飾の機能を持つ強意語に目を向け、主に共起動詞の変化から意味変化の考察を試みた。

2.2 意味拡張におけるメタファー・メトニミーの機能と認知的制約

OEDの初出例から、対象とした *fast*, *hard*, *swithe*, *yerne*, *wightly*, *quickly*, *smartly*, *snell* の通時的意味変化を概観すると、類義語内で共通の変化の流れが観察された。語義を A から G (A: firmly, B: intensively, C: rapidly, D: quickly/immediately, E: close, F: hardly, G: wisely) として表し、変化の流れを示すと、以下のようになる。

<i>fast</i>	A (OE) → B, C, D, E (13-14c)
<i>hard</i>	B (OE) → A, F (13c) → C, F (14c) → E (15c)
<i>swithe</i>	B (OE) → C, D (12c)
<i>yerne</i>	B (OE) → C (11c) → D (14c)
<i>quickly</i>	B (OE) → D (13c) → C (13c)
<i>wightly</i>	B (14c) → C (14c)
<i>smartly</i>	B (13c) → C, D (14c) → G (17c)
<i>snell</i>	C, D (14c) → B (14c) → G (15c) *G の語義は形容詞で発達

8 語の意味変化を概観すると、これらすべてに共通する意味変化の側面は、派生の順序は異なるものの、強意 (B) と迅速 (C,D) の語義をいずれかの段階で派生させていることである。さらに *fast* と *hard* が近接 (E) の意味を発達させ、*smartly*, *snell* の場合は賢さを表す語義 (G) を派生させたように、原義が類似する語は共通した変化の範囲を持つことが分かる。類義語内でそれぞれの語が共有する変化の範囲は異なり、*fast* は ABCDE、*hard* は ABCDEF、*swithe*, *yerne* は BCD、*quickly*, *wightly* は BCDE、*smartly*, *snell* は BCG の範囲で意味変化が起きている。すべての語の意味変化に共通しているのは B-C の相関性である。また ME から EModE の用例を分析すると、A から G までの語義は、メタファーとメトニミーにより相関性をもつことが分かった。動作動詞を強意副詞が修飾する場合は、因果関係のメトニミーによる意味拡張、主語や目的語に空間ではなく時間を表す語が用いられている場合にはメタファーによる意味拡張が起きていることが観察された。

2.3 強意副詞の文法化・脱語彙化

動詞修飾の事例に焦点をあて、強意副詞の通時的意味変化を HC の用例に現れた共起動詞の観察から考察した。動詞修飾の働きを持つ強意副詞については、これまで強意語 (intensifier) とは別に、manner adverb とカテゴライズされ、詳細に論じられることはなかった。しかし、強意から迅速への意味変化は、*swithe* や *fast* など、本来 ‘strongly, firmly, vigorously’ などの意味で動作に強度を付与する働きのある副詞に内在的な変化の性質といえ、この意味変化には、二つの経緯が想定される。一つ目は、迅速の概念を含まない動詞であっても、強度が付与されることで、動作に連続性が生まれ、迅速へと意味が拡張する場合、二つ目は速さのスケールが内包される動詞が強意副詞と共起すると、より速い状態が指し示される場合である。強意副詞の意味変化は、本来の具体的語彙から強意語へという、具象から抽象の意味変化の流れが主張されてきたが、強意からさらに ‘rapidly’ という語彙的意味が定着するパターンがある。今後より多くの副詞の通時的意味変化を考察する必要があるが、強意副詞は文法化・脱語彙化に終わらず、再び語彙的意味を定着させるという意味変化の一つの傾向が明らかになった。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

1. 小笠原清香「副詞の通時的意味変化と多義構造」
『第84回大会 Proceedings』日本英文学会, 2012, 23-24頁
2. 小笠原清香「強意副詞の脱語彙化と語彙化—*swithe* と *fast* の場合—」
『英米文学』第73号, 2013, 25-44頁
3. 小笠原清香「英語副詞の通時的意味変化に見られる放射状パターンとその認知的制約」『日本認知言語学会論文集』第13巻, 2013, 掲載予定

② 学会発表

1. 小笠原清香「副詞の通時的意味変化と多義構造」
日本英文学会第4回全国大会, 2012年5月26日, 専修大学生田キャンパス
2. 「英語副詞の通時的意味変化に見られる放射状パターンとその認知的制約」
日本認知言語学会第13回全国大会, 2012年9月8日, 大東文化大学板橋キャンパス
3. 「強意副詞の通時的意味変化に見られる認知的制約」
2012年度立教英米文学会, 2012年12月15日, 立教大学